
生きる意味を知りたい

のんびり桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きる意味を知りたい

【Nコード】

N2386C

【作者名】

のんびり桃

【あらすじ】

あることをきっかけに、人間不信になり、自分すら信じられなくなってしまったあみ。そんな境遇から、徐々に生きる意味を模索し始める。

プロローグ

何故こんなところに一人で立っているのだろう。

『ベタ』過ぎる。 渋谷の八チ公前なんて。 感情すら失っているのに、そのはずなのに、私は、とてつもなく・・・恥ずかしかった。

「いくらわかりやすいって言ったって・・・」さすがに、独り言も出てしまう。

待ち合わせている相手は、どうやら黄緑色のＴシャツを着ているらしい。 最悪だ。 私も今日はグリーン系のＴシャツにＧパンだ。 まるで、パールックのようになってしまっているのではないか？ そんなどうでもいいような心配をして、私は、忠犬八チ公の前で待っていた。 その、黄緑色のＴシャツの人を。

「あの・・・」

私は、かすかに聞こえた声に反応し、振り返った。
き、黄緑色のＴシャツ！！ しかも、何？ いかにも・・・って感じすぎる。

「あみさんですか？」

「あー！ー！ やっぱり、黄緑マンだ！！」

「はい、鈴木さんですか？」

「はい、そうです。 あゝ良かったです、会えて」

― 帰りがかった。 正直、無理だと思った。 悪いけど。

時は、大晦日。

私は、独りぼつちで、部屋で過ごしていた。

誰とも話すことなく、 たまに出てしまう独り言を、 自分の耳で聞く

ぐらいで、あとは、静けさだけ漂っている部屋で、たった独りぼちだった。

それは、この部屋で、というよりも、この街で、というよりも、この地球で、というよりも、それよりももっともつと深い、宇宙のど真ん中に、たった独りで彷徨っているような、そんな独りぼちだった。

もう、誰にも頼ることはしない。 誰も信じない。 誰も・・・いない。

その反面、『誰かと、何も私を知らない誰かと話したい』と、思っていた。 極限状態の私がいた。 膝小僧を抱えた、大の大人の28歳の、ぼろぼろの捨て猫みたいな私がそこにいた。

いけないことかもしれないと思っているのに、わけわからないサイトにアクセスして、どうやら出会い系というサイトにたどり着いて、適当に入力してみた。

直後、返信があった。 その結果、私は、この目の前にいる黄緑マンと会うことになったのだ。

我に返った。

私、誰でもいいから話したかったけど、本当に誰でも良かったの？

黄緑マンは、多分・・・想像だけで言ったら非常によろしくないけど、『身体』だけが目的なのではないの？

自問自答していた。

よく、出会い系というシステムをわかっていなかったし、こういうことになるのかも想像できなかったのだ。

それなのに、誰かと話したいという理由だけで、私はとんでもないことをしてしまったのだ。

「とりあえず、どこか、入りましようかね。」

黄緑マンが言った。

そして、入った先は、チェーン店の居酒屋。

カウンターに通され、店員が飲み物の注文を促す。

「あみさんは、何にしますか？　僕は、レモンチューハイで。」はい、と伝票に店員が記している。

「ビール、大ジョッキで。」

飲まないとやってられないよ、自分の行動に対してと、黄緑マンに對して。

「だ、大ジョッキですか?!」　黄緑マンが驚きを隠せなかったようだ。

だって、私は、無類のビール好きですから！　心の中で反論(?)していた。

しかし・・・いくら飲んでも、会話は成り立たないし、その男は勝手に自分の好きなものや事を話している。　とても楽しそうだ。

私は・・・申し訳ないけど、上の空だった。　どうやって、帰ろうか？　どうしたらこの状況を打破できるのか？　そんなことばかり考えていた。

カウンターの、隣に座った男女二人・・・どうやら不倫のような感じを漂わせているが、その二人が、なぜか私を気に入ってくれたようで、どんどん話しかけてくれて、ビールもどんどん勧めてくれた。　不思議だったけど、その二人との会話で、少し癒されている自分がいた。

でも、それも長くは続かずに、

「じゃあ、僕たちはこれでね。」と言って、お店を出て行ってしまった。

まずい・・・

これからどうすればいいのか？

その後のことを、空想の中でいろいろ作戦を練っていたら、さつきまで気が付かなかったのに、いきなり、私が座っているカウンターの椅子に、ガンガンぶつかってくる人がいるのに気が付いた。

そちらに意識を向けてみると、どうやら、男だけの集団で、かなり盛り上がっている様子だった。その中の一人が、爆笑するたびに、椅子を傾け、私の椅子にガンガンぶつかってきていたようだった。

『ムカツ』

そうそうむかついたり、いらいらしたりしない私だが、何故だか、その男のことが気になり、頭にきた。

何故そうしたのかはわからないけど、身も知らないその男の頭を『パシッ』と叩いてしまったのだ。

「なんだよー、いてえな〜」振り返って私に言ったけど、「あ、五月蠅いのね〜、ごめんね〜」と、酔っ払った口調で言った。

なんだか・・・気も抜けたし、気にもなるし。

あかの他人をひっぱたいた私にも驚いたし、さらーっと受け流すそいつにも、どうしていいのかわからなかった。いつそのこと、私に文句のひとつも言ってくれたなら、私も反論できて、きつとすつきりしたろうに・・・

相変わらず、私の横の黄緑マンは、私には理解できないような話を続けていたとき、その集団は会計をしていた。

ああ、帰ってしまう。お願い、私を連れて行って！ どうせならば、今日のこのとき、馬鹿騒ぎをしていたほうがまだましなの！ どうすればいい？ あー、出て行ってしまったー！

もう、終わりだ。

また、この黄緑マンのわからない話を聞くほかないのか？ それより、私はこの後どうすればいいの？そのときだった。

「いやあ、大事な大事なZippochanを忘れちゃったよ」
そう言いながら、あの五月蠅い奴が戻ってきたのだ。

チャンス！　すぐに、その男のところへ歩み寄り、黄緑マンに聞こえないように、

「私を連れ去って！」

耳打ちした。

ぽかーんとした顔をしたそいつは、「いいの？あいつ？？」そう言った。・・・聞こえないように。

「うん、いいの。なんでもないから」すごい笑顔で私は言った。

そして、私は、多すぎるはずの1万円を彼に渡し、

「ごめんなさい、私帰ります。」

と言って、お店を男と一緒に出た。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「あ、あれ？！奴らがいない！！」

飲み友達がどこかへ行ってしまったようだった。

「大丈夫？」

私が訪ねた。

「うん、大丈夫」

さっき、私が言った言葉を、今度はそいつが言った。

そして、どうしてかわからないけど、私はその人が懐かしくて、その人はどう思ったかわからないけど、私を抱き寄せて、キスをした。そのキスは、とてもとても懐かしくて、今会ったばかりの人とは思えないような、そんなキスだった。まるで、ドラマにあるシーンのように、居酒屋の外で、私たちは、何度もキスをした。そん

な
こ
と、
生
ま
れ
て
始
め
て
だ
っ
た。
。

第2話： 急展開

街を、私はそいつから一步下がって歩いていた。

「なんで、そんなに後ろにいるの？」

そいつは言った。

「なんとなく・・・」

私は答えた。

「来いよ！」

ぐつと、私の手首を引っ張った。そして、二人は手を繋いで、もうすぐ年が明けそうな街を歩いた。私は・・・男の人と手を繋いで歩くのは、これが初めてだった。28年間生きてきて、取り止めもない話を二人、歩きながらした。

「あれ？どうして、目が腫れてるの？ 殴られた？」 冗談まじりにそいつが言った。

「その、目の白いところに赤い点ができるのって、殴られて直りかけになるんだよね。」 格闘技でもしてんの？」

そいつは、続けてそう言った。

「うん、3週間前に殴られた。っていうか、殺されかけた。」

そいつは、酔っ払っているはずなのに、急に我に帰ったように驚いた顔で私を見た。

「何があっただんだ？」

「いろいろよ。」

そういうと、たった数十分前に会ったばかりの私を、ぎゅうつと抱きしめてくれた。力の限りに、ぎゅつとぎゅつと。私は、無意識に、涙を流していて、その涙を止めることができなかった。そして、私も背の高いそいつの腰に手を回していた。何も知らないそいつと抱き合っているのに、私はなんだか、久しぶりに眠りにつけそうな予感がしていた。

少し歩いて、ホテル街に辿り着き、私たちはどちらからともなく、一軒のホテルに入った。

ホテルに入るなんて、そうそうない。ホテル・・・と言っても、所謂そういうホテルだ。

物見遊山で、私はそちらこちら見てまわっていた。

「ほぉ、こんな風になってるんだ。え？これは何？ん？？どうなってるの？」

「言えよ。」そいつが言う。

「ん？言え？何を？私は、この人生で、こんなところそう入ったことないのよ。」

まじめに答えた。そいつは・・・真面目な顔をしていたのに、突然笑い出した。

「お前・・・天然？」

「ちよつと・・・失礼だね。でも・・・よく言われるなあ。」

二人で爆笑した。

そして、二人でシャワーを浴びて、そのまま、一つになった。キスをしたときのようになり、あまりにも自然で、あまりにも安らげて、私は何年かぶりにぐっすり眠ることができた。一瞬だけだけど、幸せだった。

明け方目が覚めた。そして、すぐ横に寝ている『そいつ』を私はまじまじと観ていた。酔いも覚めた頭で、目で見るとそいつは、なんだか格好良かった。

「ふーん、かっこよかったんだね。」

ふと、言葉に出すと、そいつは、眠そうに目を覚ましてしまい、私を見た。

「なんだよ・・・まだ夜中だろ？」

「もう、お日様が出てきたよ。」

「ふーん・・・」

それだけ言っと、私の肩を引き寄せ、また優しく私を抱いた。そんな・・・一夜で二度なんて。それだけでも驚く私にはお構いなしに、愛してくれる。

そして、何度も愛してくれた。

なんだか・・・このまま、何も考えずにいたかった。そのことが、何よりも心地よかった。

朝10時。 チェックアウトの時間が来た。

「どうする？これから？」

そう聞くそいつに、私は何も言えないでいた。

「俺、彼女いるんだ。それなりに付き合ってるけど、どうなるかはわからない。お前は？」

「・・・孤独な女よ。誰もいない。独りぼっち。だから、あ

なたが気が向いたら、どうにかして。」

そう言つて、携帯NO・とメールアドレスを教えた。

「無理しなくていいからさ。私は、今日のことだけで、かなり救われた。あと何日かは行けそうだよ。」

笑つて、そこから立ち去った。

うん、少し生きていけそう。

なんとか、生きていけそう。 もうちょっと待ってみよう。 死ぬことはもうちょっと先でもいいか。

前を向いて、とは言えないけど、立ち止まろうという気持ちになっている自分がいた。 それだけで、前進してる気分になっている私がそこにいた。

2日後、『そいつ』からメールが入った。

「会おう」

驚いた。まさか、連絡してくるなんて思ってもみなかったから。

あいつ・・・絶対私となんて会わないほうがいいに決まってる。そう咄嗟に思った私は、返信をしないまま放っておいた。

「なんで連絡しねーんだよ。メールして来い！じゃなかったら、携帯NO・入れとくから、電話して来い！」

そう書いて、送ってきた。

心が、ちよつとだけ動いた。ばかだねえ。もうすぐ死ぬやつに

こんなメール入れて。

でも、返信を押している私が居た。

「彼女に悪いっしょ？」

それだけ送った。

「うん、悪い。でも、もう少しお前のことを知りたい。だから、悪いけど、もう一度会ってくれ。」

ふー・・・

どうしよう。彼女からそいつをとるつもりなんてさらさらない。

あの日、幸せな気持ちを一瞬もらったのは絶対的な事実だ。だけど、幸せな二人を引き裂くようなことは、できない。私は、知ってしまったのだから。

「会ってどうするの？彼女に気の毒だと思う」

「会ってくれ」

そのやり取りが、しばらく続いた。

「わかった。会って話そう。」私は、ようやく、了解した。

待ち合わせは、とある駅のロータリー。時間通りにそいつは現れた。

「よお。ちよつと久しぶり！」

私は、手だけ上げた。

「乗れよ」

車に促した。私は・・・ちよつと彼女の席に座ることに躊躇した

けど、まさか後ろの座席に座るのも不自然なので、助手席に腰掛け
た。

「お前、可愛いな」

な、何？急に。

「えっ？何？」 そいつを見た。

「なんかなあー、すげえ可愛いよな。」 ……笑ってる。 ばか
にしてるのか？

「なんか……馬鹿にしてるの？」

「はっはっはー」 ただ笑ってる。 何？こいつ？

「俺、お前みたいな奴に会ったの初めてだよ。」

意味わかんない。 どういう意味なんだ？ ……ま、いつか。

車を、郊外も郊外、ずっと走り続けて、ど田舎？つてどこまで走っ
てきていた。 なんか、気持ちいい。 道の駅とかいう、建物があ
って、大きい駐車場があって、そこに車を停めた。

「でさ、なんだったんだよ。」

何？またこの急な質問。 しかも、こんなど田舎に連れてきていて。

「何の話？」

「この間のだよ。 お前、目に赤い点があつたじゃん」

「あー……覚えてたんだ？ 何でもないよ。」

と、だけ答えた。

「何でもないわけねーだろ。 何があつたんだよ。」

「言いたくない」

「そっか」 少し、沈黙が続いた。

「っつーことで、俺たち付き合つか」

はあ？ なんて、『っつーことで』なわけ？ 意味わかんない。

「どういうこと？ 彼女がいるんでしょう？」

「うん、別れた。付き合ってる意味をよく考えたけど、なかった。きつと、お互いだよ。だから、付き合おうぜ。」

意味、ますますわかんない・・・

「それで、すぐ私が『うん』って言うと思ってんの？」

「思っていないよ。ゆっくり行こう」

言葉を失った。

読めない男だ。

この先、どうなるんだろう・・・

第3話：ダークグレーの過去

28歳。 私にとって、この1年ほど苦しく辛い年はなかった。
23歳の春、私は結婚した。 幸せなはずだった。・・・はずだったというのは、自分で幸せだと思い込もうとしていたのかもしれない。ただ、家を出なかった。ある意味、独りになりたかった。それには結婚が一番よかったと、幼い頭で考えたこともあるし、私はその結婚相手を、神の前で誓ったように、『愛している』と思いを込めていたのだ。

結婚生活は、最初から言葉の暴力で始まった。その度に傷つき、でも、我慢するのが結婚なのだ、と、自分自身に言い気かせ、なんとか続けていた。

だけど、辛かっただけではなく、優しい一面もあったりして、そんなとき、私は『大丈夫。間違ってるんじゃない』と、思い直していたのだ。

言葉だけではない暴力が始まったのはいつだっただろう。思い返せば、結婚する前に、ちょっとした私のミスに激怒し、山奥に連れて行かれて思い切り平手打ちを食らった。それが一番最初だ。だけど、私は、そのときに言った。『暴力は、この世の中で一番嫌いなもの。だから、結婚してから暴力を振るったら、私はそのときに離婚する。』と。

一番卑怯者は、弱者に対して、会話ではなく、会話が成り立たなくなったら暴力で制するということだ。言葉が通じないのはどうしてだろうか、と、まずは考えなくてはならないと思う。通じないならば、その時点である意味The endなのだ。どうしようもないこともある。

そこで、暴力に訴えてしまいうしかないのならば、もう、その先はな

いのだ。

戦争がいい例だ。 どうにもならないから、武器で。 なんと、安易な考えだろう。 もっともっと、話し合わなければいけない。

もつと、相手を思いやらなければいけない。 その末にも話し合いがつかないのならば、それは、どうしようもないことなのだから、譲歩するとか、あきらめるとか、術はいっぱいあるだろう。

別れもその一つだろう。

なのに、夫は私に暴力を振るうようになってしまった。 徐々に強く強く。

家の中は、もうどうにもならないぐちゃぐちゃになってしまっていた。 襖は、骨組みから壊れ、自家用車は、ぼこぼこに蹴られ・・・私にはどうすることもできなかった。

一つ、私に神様が与えてくれた大切な宝物があった。 その結婚で、たった一つ大切な宝物が生まれた。 娘だ。

妊娠がわかったときに、すでに結婚していたのにも関わらず、夫に言われた。

『堕ろしてくれ』

目の前が真っ暗になった。

この人・・・何を言ってるの？ 命だよ？ しかも、私たちは、もうきちんと結婚している。 婚姻届を出している、社会に認められた夫婦だよ？

そして、泣いた。 何に哀しかったのか、それすらわからなかったけど、とにかく泣いた。 泣いて、泣いて、『命を無駄にはできない。 私は、何があっても産む』そう言って、なんとか夫に納得させた。

私にとって、とても大きい傷だった。

でも、その命は、それまで生きてきた私の人生の中で、これほどに

もないぐらい愛おしく、愛おしいという言葉では足りないぐらい・
・私の命だった。その大事な大事な命のために、いろいろなことを我慢することができたのだと思う。だけど、そんな日々も、限界が来ていたことは否めない。私は、毎日1時間も眠れない状況で、育児と仕事を抱え、精神、肉体、全てにおいて限界に達していた。夫は・・・仕事が終わった後も、飲み会や、博打などで、帰ってくるのは明け方だったのだ。

そんなとき、結婚前にずっと好きだった人から誘われた。その人は、そう、それほど堅実でもなくて、私を都合のいい女にしていた人だ。

だけど、私は誰よりもその人のことを好きだった。誰よりも何よりも。彼がいたら、それだえでよかった。だけど、彼はそうではなかった。

「お前のこと、楽だし、好きだけど、結婚を今は考えられない」と言われ、そして、終わったのだ。その後、結婚相手と、出会い、私はすぐに結婚した。

そう、誰でも良かったのかもしれない。私を家から引っ張りだしてくる人だったら、誰でも。だから、結局は、私が悪いのだ。全て。

その彼からの、職場への電話にはさすがに驚いた。この人何をしてるの？って。彼にはその時、婚約者がいた。もうすぐ結婚、という状況だった。風の噂で聞いていた。なのに、何故？

「小川さん、外線です。繋がりますよー。」総務から、電話が回っ

てきた。

『はい、小川です』

『元気にしてるか？』

『まあ。どうしたの？』

『会うか？』いつも勝手だ。

『はあ？ 何言ってるかわかってる？』

『会うか。』

『・・・・・・』

『会うか！』

『わかったよ。』

弱い私がいた。 ダメだ。 やっぱり、彼には叶わない。 きっと・

・ずっと私の中では、消えずに続いていたのだろう。 バカだ。

私は、大バカだ。

土曜日の昼間、職場の近くに迎えに来た彼。

私は、週のうち一日休みをもらう代わりに土曜日出勤していた。

その土曜日の午後、お休みをもらい、彼と会うことにした。

「変わんねーな。」

第一声、それですか。

「あんたもね。」

私も、、それですか。

のりのいい二人は、数年経ったとは思えないぐらい昔に戻っていた。好きだ・・・やっぱり、この人しかいないのに。 でも、もう、無理なんだから。

彼の車に乗り込み、しばらく海沿いを走った。

「どうよ、ここんところ」

ちよっとふざけ気味に私が訪ねる。

「ふん、どうだろうな。」

彼は、相変わらず、ぶっきらぼうに答える。

「そっか」

「ん」

楽だ。この感じが、私は居心地がいい。

そうこうしていると、かわいらしいホテルの前の駐車場に車を停めた。

「なんなのよ、ここ」

「ホテルだろ？」

「そら、見ればわかるさ。何だよ？」

「そういうことだ」

「???」

「降りよう。」

「なんで?!」

「いいから」

有無を言わせないとこころが全く変わらない。

部屋に入ると、

「俺、婚約解消するんだ。」

「な、なんで?! 幸せなんじゃないの？」

「考えたんだ。このまま一緒になつたとして、あいつは、家事も完璧にやるだろうし、きっと子供とか産まれたら、育児もしっかりするんだろう。それは、ありがたいんだろうど・・・」

「けど？」

「だけど、笑ってる二人が見えない」

「？」

「俺は、お前といるとき、お前のバカみたいなところを見て、いつも楽しかった。それでおちよくって、俺も笑ってることが、すごく好きだったんだ。だけど、その反面、お前はいつもクールで、それ

ほど俺のこと思ってもないような態度をとる。不安だった。こいつ、本当は俺といっても俺のこと好きでも何でもないのか？って」明らかに、それは、私が思ってたことでしょうよ。今更何言ってるの？ ふざけないで！ そう思いながら・・・そう思っているはずなのに、嬉しかった。

「私は・・・あんたと一緒にいることが全てだった。だけど、あんた、ふらふらいろんな人のところに行ってたでしょ？ それでも良かった。だって、私は、どんなあんたでも好きだったから。でも・・・私を突き放したじゃない。だから、私は、今結婚してる夫のところに走ったんだよ。」

「そうだな。失うと、すごく浮き彫りになるんだよな」言葉にはもう出来なかった。私の、搾り出した言葉の全てだったから。

神様は、時にいじわるになる。

それは、きつと、『真実』を知らせるためなのかもしれない。結局は、辛いと思うことでも、『それは間違っているんだよ』と、教えてくれているのかもしれない。

「シャワー浴びて来いよ」

なんなの？この態度！？ でも・・・私、バスルームに行ってた。そして、念入りに体を洗っていた。

彼がシャワーを浴び、出てくるとすぐに私のところまで歩みより、手を引っ張られ、ベッドに倒されて・・・

彼は、前のままの彼だった。何も変わっていない。自己中心的な性。

でも、私は、どんな彼でも、彼だけが私の中で満足したとしても、ずっと好きだったし、愛していたし、今も変わらないことを知ってしまった。

もう、離れられないでしょう？ どうすんの？

自問自答。

私、どうすればいいんだろう。

せつかく、ケリを付けて、かれと別れてからの数年間、苦しくても、思い出の曲を聴いて泣いても、それでも抑えていた私なのに、もう、抑えきれないよ。 どうすんの？

彼は、一度私の中で満足したら、イビキをかいて寝ていた。

っていうか、私、仕事に行ってることになってるし、いつまでもここに居られないでしょう？ どうすんの？

考えあぐねて、メモにメッセージを残して帰ることにした。

「私、もう帰るね。 ゆっくり休んでね」

タクシーを呼んでもらって、駅まで辿り着き、家路につくまでにしばらく時間がかかった。

「何やってたんだよ！」

今にも襲い掛からんとする夫が玄関に立っていた。

「ごめん、残業していて・・・」

「じゃあ、今度は金がいいな！」

そう言つて、機嫌を直して居間に向かって歩いていった。

金ですか・・・ 虚しい。 お金だけ生きがいを持つなんて。 でも、それで、暴力から免れたのなら今日は良しとしよう。

子供と夫の夕食を手早く用意し、食べさせ、やっと今日が終わる。なんと、あわただしい一日だったか。

私は、この先どうするのか。

もう、今日は眠る。

どっせ、そう長時間眠れないのだから。

第4話：ブラックな過去

なんとか、この間のことを乗り切った。

でも、いつこのことがばれて、またあの暴力を振るわれるのだろう。そう考えると、慣れたとはいえ、不安だった。

日々がなんとなく過ぎて、毎日の1、2時間の睡眠の中、家事・育児・仕事をこなしていた。限界とは、どこなのか？と毎日考えていた。

そんなとき、またまたあいつから外線が入った。

『俺』

『わかるさ。』

『どうする？』

『何がよ？』

『会つか』

『ほんとねえ・・・』

『迎え行くから』ガチャ。

切れてんじゃんー！

本当に、我儉な奴だ。あの人の頭を、一度解剖、いや解体（？）したいぐらいだ。だからと言って、脳を見ても何もわからないけど。

結局、私は、子供の保育園のお迎えを実家に任せ、彼が迎えに来るのを待った。・・・まったく、こんなことばれたら、また夫からボコボコの仕打ちだよ。

でも・・・どこか、彼を待っている自分がいたような気がする。

「いよっ！」

『いよっ！』じゃねーよ！この、我儉男が！！

「なんなの?! 一体!!」

「お前、何でこの前勝手に帰ってんだよ。」

「当たり前でしょう? 私、家庭があんの! ……まあ、あんなことしちゃって言うのも何だけど……」

「だろー? お前、同罪だぞ」

「こいつ……!」

「何なのよ、どうしたいの? ちゃんと言いなよ!」 ちよつと、
イラっときてる私がいた。

「ちゃんと? どう言えばいいの?」

「ん、わかんないな」

あほか。 やっぱり、私があほなんだ。

「別れるよ。 お前、幸せじゃないだろ?」

言葉が……出ないよ。

でも、もう、昔の私たちじゃないんだよ。

「無理だね。 私には、娘がいるもの」

「俺と3人で生きてけばいいじゃん。」

本当に、本当に、あんたは甘い。

「無理だよ。 あんたの子供じゃない。」

「血なんて関係あんのか? 俺はお前の子供ならば一緒に生きて行けると思う。」

無理だよ……

「でも、きつと無理なんだ。 別れることが無理なもの。 あんたに迷惑をかけないんだ。」

「お前、何言ってたんだ? 何があんだよ。 思い合っていないのに、一緒にいんのがおかしいんだよ!」

「わかんناすぎるよ。 とにかく無理だから。 じゃーね。」

遅いよ。

なんで、あのとき言ってくんなかったの？ そしたら、二人で、何の障害もなくきつと楽しく過ごしてたんじゃないの？
でも、もう、あの頃とは違うんだよ。

家に戻っても、相変わらずだった。

私は、何を希望にこの家庭にいるのか？

子供を心から思うという、それだけは頭が下がる夫から、どうしても子供を取ることなんてできないと思っていたけど、一緒にいることのほうが良くないことなのではないの？

そんな考えが頭に浮かんでいた。 ふと、夫に言った。

「別れない？」

「お前、何言ってるのかわかってんのか？ もし、別れんなら、一人で出てけ。俺は、楓を取るからな！」

案の定だね。 でも、裁判にかけたら、きっと私が子供を取れると思うけど。

「私は、楓を離さないよ。絶対に。」

「じゃあ、別れらんねーな。」

含み笑いをして、夫が言った。 私は、その顔を見て、真剣に別れることを決めていた。 もう、無理だ。 暴力も何も、我慢することとはもうできない。

もつと、順を追って事を進めたほうが良かったのに、思考能力を失っていたのか、私の心はぐちゃぐちゃになっていて、あいつと一緒にいることも多くなってしまっていた。

それを夫に知られるのに、時間はさほどかからなかった。

そして・・・

二人とも、夫からの殺意の暴力を受け、仕舞には殺意の暴力どころ

か、刃物で殺されそうにすらなってしまう、警察のお世話になることになった。

何もかもが終わった瞬間だった。・・・修羅場だった。血の海
つて、あるんだって、知った。

私は、顔を骨折し、全身打撲の重症。顔は変形し、もう治らない
かもしれない、とまで言われた。彼も同じような状況だった。

だけど、私たちは、警察側から被害届を出したほうがいい、という
申し出に、NOの答えを出した。何があっても、自分たちの非を
認め、子供のこれから考えた末だ。

第5話： 死へと・・・

病院のベッドで、私は、一人ただただ泣いていた。泣くというよりも、嗚咽、のほうがつくりいく表現かもしれない。こんな泣き方、したことがない。こんなに涙が体の中から出るなんて、知りもしなかった。それぐらい、泣いて泣いて泣き続けた。

今は、娘は、私の実家で面倒を看てくれている。だけど、いつ連れ去られるかわからないような状況にあった。

父が、いろんな手続きのために、私の病室を訪れた。

「お前、顔戻んねーみたいだぞ。」笑って、言った。

私は・・・また、涙が溢れた。自分の蒔いた種の、収穫するには重すぎる現実には、何も考えられないのだけど、涙が溢れた。両親に迷惑をかけたことは認めるが、ここでそんな風に笑って吐かれた言葉が哀しかった。

「そう、しかたないね。」なんとか答えた。父は、出て行った。

私の顔は、変形も酷く、病室から出ることにすら担当医に窘められる始末で、ただただ病室にいるしかなかった。ふと、点滴を片手に病室を出ると、担当医が、

「あなた、何してんの？そんな顔で。病室にいなさい！」

そんな感じ。そっか・・・人様に見せてはいけない顔なのね。と、察知して、ずっと病室に閉じこもっていた。

隣には、一緒に暴力を受けた彼が入院している。時折・・・人づてに、私に差し入れをしてくれる。ただ、あれから一度も顔を合わせていない。お互いの両親から、ストップがかかっているからだ。

会いたい。とにかく、すぐにも会いたい。本心はそうだったけど、周りのたくさんの人に迷惑をかけたことは間違いない事実なのだから、と、お互い暗黙の了解で会わずにいた。

皮肉なもので、今だったら、誰に遠慮することもなく、すぐに、『トントン』と、ノックすれば会えるはず。それが、こんなに近くににいるのに、会えないのだ。

そうこうしているうちに、彼の怪我は私よりも軽かったこともあって、先に退院していった。入院しているときから、結局一度も顔を合わすことはなかったのに、いざ、退院してしまうとなると、途端に孤独の淵に落ちたような気持ちになった。

会いたい・・・正直な気持ちだった。

それからまた1週間が過ぎた後、私も退院の許可が降りた。まだ、顔も体も完全に治ってはいなかったけど、なんとか入院していても大丈夫なところまで辿りついたらしい。

退院するや否や、子供の親権の問題で、夫の親族と、私の親族とでの話し合いが続いた。

最終的な結論は、子供は、夫側に任せるということになった。

私の親は、『もし、楓をこちら側で面倒みることになったとして、そうになったら、いつかお前を殺しに来るぞ。そうになったら、楓は、殺人犯の娘になってしまふ。その先、どれだけの苦しみを味わうことになるかと考えたら、あちらに任せるしかないだろう？ お前が蒔いた種なんだ。』という意見だった。

頭ではわかる。楓のことを、きちんと思ったら、それしかない、って思う。そう、私が蒔いた種だ。でかすぎる、悪すぎる種だよ。

でも、理屈じゃないんだよ。私は、楓と離れることなんて、できないの。

そう、思ってたのに、最終的に、楓とは離れることになった。
もう、全てが、セピア色どころか、暗い、グレーの色に染まってしまったようだった。 全てが終わった。

その後は、籍を抜いたら、実家に戻るか？と、一応聞く親に対して、「一人の籍を作るわ」そう言って、抜いた籍は、自分だけの独りぼっちの籍になり、生活も、誰にも知られないように、誰にも教えず、独りで住むことにした。

私は、本当に独りぼっちになったんだ。 そう、感じた。

来る日も来る日も独り。 顔が、なんとか良くなってきたからは、仕事に行つて、帰ってきて、の繰り返し。 どれだけ、ちゃんと話をしてないんだっけ？

独り暮らしの部屋で、食事もせず、ただぼうつとしていると、携帯電話の呼び出し音が鳴り響いた。 目をやると・・・彼だった。 どうしよう、出ないほうがいいよね。 そうわかってはいるのに、思わず出てしまった。

「もしもし。」

「大丈夫か？」

「・・・」

「大丈夫なのか？今どこにいるの？」

「うん、大丈夫だよ。でも、もう、ダメだよね。」

あまり、的を得ない答えをした。

「俺は、何も出来ねえんだな。結局・・・ダメだよな。」

「・・・」

「会つか？」

「今、会つて、またわかったら、もう大変なことになるでしょう？」

「でも、会つか？」

寒い寒い季節。特に、その日は凍えるような日だったんだ。

「わかった。行くね。場所、どこ？」

そう、彼のいる場所を聞いて、私は、出かけた。

会ってみてわかったことは、彼の親御さんは、絶対に私とは別れなくてはいけないと言っているということ。彼は、私とは一緒にいたいと思っではいるということ。

でも、親には逆らえないと、最後まで言っていた。

そう、The endが来たということだ。やっと会えたのに。全てを、私が本当に心から愛する全てを失った瞬間だった。

もう、何も無い。

孤独以外。

生きる意味がない。自分だけ生きても仕方がない。

親友だと思っていた友達も、面白おかしく私のことを言っているという話も聞いた。そして、彼とのことを夫の耳に入るようにしたのもその親友と思っていた人だと。

もはや、人間を信じるということに疑いを持つ私に、何も障害などなかったのだ。もう、いいよね？ 私、バカ正直に生きてきたけど、人を疑って、そして、愛を失くしても、いいんだよね？ それしかないよね？

誰も答えてくれないのに、心の中で、ひたすら応答を欲していた。誰か、答えを頂戴よ。どうすればいいの？

でも、誰も答えてなんて、くれないんだよね。

だから、後は、『死』という終焉だけを目標に生きることにしたん

だ。

第6話： 屍

私の頭には、生きるということよりも、死へ向かうことばかりで溢れそうになっていた。　どうやったら死ねるか？

首を吊る？　入水？　飛び降りる？　手首を切る？　薬？　・・・

見つからない。　そして、結局は楓のことが頭に浮かんで、自殺はダメだ。と、考え直す。　その繰り返し。　これ以上、彼女を苦しめてしまうような事を私が増やしてはいけない。

ならば、どうすれば命は終わるか？　病気になるばいい。　でも、すぐには死ねないだろう。

毎日、食事は喉を通らず、お酒とタバコに依存し、睡眠はといえば、毎日殆ど眠ることができない日々が続いていた。

『このままこの状態が続けば、いつかは死ぬかもなあ』　ぼんやり考えていた。

私、生きてるけど、生きてないみたい。　屍だ。　呼吸だけして、それだけ。

あの修羅場から、どのくらい経っただろう。　もうどれだけ、人と話していないだろう？　ふとテレビのスイッチを点けたら、今日が大晦日だということがわかった。

「ふうん、大晦日だったんだ・・・」　ふと声を出していた。　すごく久しぶりに聞いたのは、テレビの中の声と、私の独り言。　なんか、滑稽だな。

ふと、どうしようもなく、誰かと話をしたくなった。　私をどこのだれかもわからない誰かに、思い切り、全てを話したい。　究極の孤独感に、何かに対する恐怖感に、居ても経ってもいられなくなってしまったのだ。

誰でもいい。

やっこのことで調べたのは、出会い系サイトのようなだった。書き込んでみると、すぐに返信が来て、話しをすることになった。話してみると、会うことになり、渋谷に向かった。

そして、それが黄緑マンで、その後、アイツと出会ったのだ。

狂いたかった。狂ってしまえたら、感情を失えるのではない？ そうなれば、私はこの苦しみから逃れられるのでは？ それだけで良かったんだ。もう、自分を生きていないようなこの状況ならば、いつそのこと、全ての記憶を消してしまい、どうしても生きていかなければならないのならば、感情を奪い去って欲しい。楽になりたい。

自分のした事の重大さは、よくわかっているつもりだけど、でも、苦しさには耐えられない自分もいた。

でも、私の心は、自分が思っているよりも頑丈に出来ているらしい。どれだけの苦しみを感じても、心が壊れてしまいそうな哀しみの中にいても、楓を失ってから感じる、子宮の痛みを抱えても、それでも心は『哀しみ』という感情をしっかりと感じていた。それ故、苦しい。

生きること、死ぬこともままならない状況を、どうしたらいいかわからなかった。

第7話：動き出す

『ゆっくり行こう』と言ったあいつは、川本寛哉と言った。

寛哉は、毎日、メールなり電話なりしてくる。「大丈夫か？」

とか、「よー！」とか、そのときによつて様々だ。

ちゃんと言わないといけない。そう思った私は、彼を誘った。

「明日、会えない？」

「おおー、やっとその気になったのか？！ おっしやー！ いいぞ！
！」

んー、なんともこの人は楽天的過ぎるなあ。 すごく重いこと、
話すんだけど・・・

「じゃあ、よろしく。 この間のお店で」

「了解！」

ふう。 調子が狂います。

翌日、大晦日に会ったあのお店で会うことにした。

彼は、約束の時間通りに来た。

「よお！」

「ども」私は軽く会釈した。

「どうよ？」

「どうもこうも」もごもご・・・

すると、寛哉はまた爆笑した。

「え？今の会話で何かおかしいこと言った？私」

「なんか、おもしれーんだよなあ。 なんてかなあ。 見てたいんだ
よなー。」

複雑よね。 そんな、喜べないよ。 変なヤツみたいじゃん。 で
も・・・よく言われるな。 私って変なのかな？ いやいや、そんな
ことどうでもいい。

「とりあえず、飲もうぜ！ すいませーん！」

すんごい大きい声ね。 通りすぎよ、その声。

「何にすんの？ビールか？」

「え？！何でわかんのか？」

「だってお前ー、あんとき大ジョッキ飲んでたろ？ 大ジョッキ飲むやつなんて、ビール好きじゃないと有り得ねーぞ。」 笑って言うてる。 でも、見てたんだ。

「うん、ビール好きなの。」

「俺も！」

店員が、ビールを運んできてくれた。

「とりあえず、乾杯だな！」

そういうノリの話はしないんだけど・・・

「う、うん」

「かんぱーい！」

だからー、声がでかいよ。

「あー、うめえ。で、なんだよ？」

「ふー、あ、ああそうだよな。 ちょっと美味しかった。」 この発言に、また爆笑してる。 この人・・・ 私も前はよく笑っていたけど、それと同じくらいよく笑う人だな。

「今日は、私の一方的な話を聞いてもらいに来ました。 その結果、最終的には、今日でさよなら、ってことになる予定です。」

「お前って・・・ほんと面白いな。 それしか言えねえ。」 また笑ってる。 だから、笑い話じゃないんだってば。

「じゃ、行くね。」

そう言っと、これまでのことを、嘘つくことなく、私の非を含めて話した。 だから、一緒にはいないほうがいいと言った。 もう、人も信じられないし、恋愛なんて考えられないって。 一緒に暴力を振るわれた彼のことも、きつとずっと忘れられないって。 全てを

話した。

笑ってばかりだった彼は、だまって考えている様子だった。そして、口を開いた。

「俺には、わかんねえ。同じ経験もしたことねえし・・・だけど、いくつか思ったことがある。一つは、もう、その男のことは忘れる。最低だぞ。お前だけが悪いわけねえだろ？確かにお前も悪いところがあった。でも、もっと最低なのは、そいつだぞ。それだけのことしといて、親が反対だからって、お前を捨てんのか？男じゃねえぞ。それが一つな。もう一つは、お前は、自分ばかり責めてるけど、やめろ。それだけのこと、ちゃんと力タをつけただろ？これから、前を向くようにしろよ。お前・・・なんで俺がお前に興味持ったかわかるか？何かあるやつってすぐわかったけど、お前の目が、死んでなかったからだよ。目が、生きてた。俺が今まで出会ったやつの中で一番生きてる目を持ってたぞ。だから、このまま腐んな。俺は、お前を守ってやる。生きる！」びっくりした。

出会ってから短時間しか経っていないのに、ここまで私のことわかってたなんて。

「そうだね。きっとそうなのよね。でも・・・私は、もう無理。

これから先のことなんて考えられないし、ただ楓のことだけで生きている状態なの。私と一緒にいても、未来なんてないし、あなたの人生にきつと良くないと思うよ。だから、今日でおしまいにしてお願い。」

私は彼に本心を言った。

「お前・・・決めんのは俺だろうよ？お前は、取り合えず俺といってみろよ。どうせ、恋愛なんてする気ねえんだろ？でもよ、寂しいだろ？一人でいても、ロクなこと考えねえだろ？だから、ちよつと様子をみてみる。生きるも死ぬもそれからだぞ。」どうしよう・・・

揺らいでいる。私は、実は生きたいのか？ よくわからなくなってきた。思考能力の限界だ。酔いのせい？ いや・・・ちょっと感動している自分がいるような気がした。だけど、そう簡単に信じるなんて、もうできないんだよ。昔の私だったら、きっと、すんごい嬉しかっただろうな。

「あなたが、嫌になるまでにしようか？」

「よっしゃー！じゃあ、今日からは、プレ恋人だな。まだ、お前恋愛じゃねえもんな！」

すんごい、直球ね。嫌いじゃないよ。

それから、私にも徐々に明るさが戻った。不思議だけど、それまでの苦しみとか、一時忘れれたようだった。彼のおかげだろう。結構酔った二人は、時間も時間だったので、店を出て、そこで別れた。

私は、帰り道、これで良かったのかな？とだけ考えていた。

さっきまで前を向けそうな自分がいたのに、その反動のように部屋に着いてから、また前の私に戻っていた。

なんだか、もっと虚しくなってしまうたようだった。

生きる意味・・・私に本当にあるのだろうか？こんなに苦しくて、哀しくて、どうしようもないのに。こんなにも大きい十字架を背負っているのに。

あつという間にどん底に落ちている自分がいた。

絶望とは、こういう気持ちを言うのか？

私は、衝動的に剃刀を手に使っていた。そして、手首に当て、一気に引こうと思ったそのとき、電話のベルが鳴った。咄嗟に電話の方を見た。剃刀を手首から離していた。

電話に出るべき？ ううん、出ない。電話が切れた。

また、今度は震える手で剃刀を持ち、手首に当てた。一気に引いてしまえば、楽になれるんだから！

また、電話の呼び出し音が鳴った。私の手が止まる。

とうとう、電話に出た。寛哉だった。

「お前、何してんだ。」

「……」

「答えるよ。」

「何も……」

「じゃあ、なんで出ねえんだよ。」

「別に……」

「変なことしようとしてねえだろうな？」

涙が溢れた。何で？ この人、何なの？ 何でわかったの？

「やめろよ。絶対にやめろ？ 俺、今から行くからな。待つてろよ。」

「……」

「……だって、家わかんないでしょう？」

「……そうだった。教えてくれ」

なんだか、すぐおかしくなって、爆笑してしまった。もう、大

丈夫だよ。死ぬなんて、しないで済みそう。

「大丈夫。なんか、大丈夫よ。寝てね。明日も仕事でしょう？」

「……」

「行くよ」

「もう、いいの。大丈夫、死なないよ。救われた。生きるべき

なんだね、きつと。ありがとう。また、明日。」

「大丈夫なのか？ 俺は、いるからな。それより、住所、後で教

えるよ！」

マジで言ってる彼がまた、面白かった。そして、ありがたく、申

し訳なかった。

生きなくちゃ……

その気持ちだけは、しっかりと芽生え始めていた。

第8話： 永遠・愛・憎しみ

しばらく時が経ってから、相変わらず寛哉は私の傍にいてくれた。どういふ関係なのかなあと考えてみても、『恋人』とも違うし、『友達』でもない。なんだろう？ でも、友情のようなものはあるような気がする。ただ・・・私はやっぱり『男』としては見ていなかった。一緒にいることは、とても自然で、二人は案外似ていて、意思の疎通もあって、何も問題ないかのように日々が過ぎていった。 どういふ関係なのだろう。

半年が過ぎようとした頃、ふと、寛哉が居酒屋で私に言った。

「お前って、やっぱりそのままなんだな。」

「へ？」

「へ？じゃねーよ。そのままなんだな、って言ったんだよ。」

「そのまま・・・？どういう意味？」

「俺さ、お前のこと会ってすぐにわかったような気がしてたんだ。

だけど、心のどこかで、こんなやついるわけねーって思ってたのも事実なんだ。それで、半年経った今、やっぱり、そのままなんだ、って思ってたさ。」

「ん？言ってる意味がわかんないよ。」

「お前みたいに生きれるやつってそういないんだよ。」

「えー？どういう意味？私は普通に生きてるんだよ・・・そりゃあ、酷いことしかしてしまったのは事実だけど・・・嘘をついては生きていけなかったし。でも、だめだよな。」

「そういうことだよ。みんな、嘘もつけば、自分にいいように生きてるんだ。世の中って案外そんなもんだぞ。 けどさ、お前は、なんつーか・・・真っ直ぐにしか生きねーだろ？だから、人も傷つけるし、自分が一番傷つくんだよ。 だけど、本当はみんなそう生きれたらいいと、どこかで思ってたんじゃないのかな。 それをさ、

本当なのか？こいつ、マジでこんな生き方なのか？って、俺の中
も信じ切れなかったところがあったんだよな。」

ええー！？！ 何？半年も私のこと疑っていたわけ？ どういう
ことよ！！ ふと、そう思ったけど、どうやら、けなしてるわけ
もないみたいだし。

ま、いつか。

「私はさ、ずっと前から私で、今も私で、これからも私だよ。 何
も変わらないし、いつも変わらない。 嘘つかないで、思ったこと
言って、間違ったら謝ってさ、そのまま生きてるんだよ。 それだ
けのちっぽけな人間だよ。」

「すごいな。 お前といると、俺は案外きたねえ人間かもな、 って思
うときがあるよ。」

ふと、寛哉の顔に、いつもとは違う表情が見えた気がした。

「ずっと、いてくれよ。」

「永遠なんて、ないんだよ、寛哉。 有り得るとしたら、最後まで
あきらめずに通した結果、永遠だったんだ、 ってことだけ。 結婚
式で、『永遠を誓いますか？』 『はい、誓います』 って言ってて、
すぐに別れちゃうじゃん。 永遠なんて、最後まで行かないとわか
らないもののなの。 だから・・・ 『ずっと一緒にいる。』 なんて、 今
の私には到底言えないよ。」

「そうだな。 そうかもな。」

寛哉といると、私は落ち着いていることができたけど、この半年だ
って、毎日が穏やかなわけじゃなかった。

別れた夫が、例の彼に慰謝料を請求したり、私にも請求してきたり、
その他、娘のアルバムを全部返すように言ってきたり、その都度私
は落ち込み、泣き続けたりした。

請求されたお金は、私も払ったし、彼も払ったようだった。 彼に
は、払わないように、払ったら、恐喝になってしまいうから、それだ

けはやめるようにと私の親が言ったのも聞かず、払ったようだった。

そして、その後、彼は、別の女性と結婚するのにお金がなくなってしまったらしく、私にその分を請求してきた。

もう、その頃の私は、脅しだとか、裏切りだとかに無感情になってはいたのだけど、それでも心が破裂しそうなぐらい苦しかった。

だって・・・自分の命よりも愛していると思っていた彼から、今度は夫と同じように恐喝のようなことをされたのだから。

メリットとしたら、彼を、きちんと忘れることができるかもしれない、という事実だけ。

もし、傍に寛哉が居なかったならば、私はとつくに命を絶っていただろう。 それぐらい、周りのバッシングも、元夫の仕打ちも、そして・・・彼の仕打ちも打撃だった。 心は、寛哉といえるからといって、健全ではなかったけど、それでも救われたのは事実だった。

人って一体なんなんだろう？

憎しみとか、愛とか、よくわからなくなっていた。

私は・・・どれだけのことを元夫からされても、顔面骨折を負って、顔が若干変形しても、目の後遺症を負っても、それでも元夫を憎むことだけはできなかった。

喜んで暴力も受けたわけではないし、壮絶な結婚生活を楽しんだわけでもなくて、それは辛いものだったけど、そのことがなかったら今の私にはなっていない。 それら全てが、私を創ってくれているのならば、受け入れて、そして、元夫の幸せを、楓の幸せと共に祈りたいと思っている。

でも、そういう思いで生きる人ばかりではないのだな、って、知ることは、辛いけど、仕方のないことなんだ。

そう、割り切るほかには、何も術はなかったんだ。

昔から、友達に、

「なんであんたは都合のいい女になんのよ？もつと、自分を大事にしなよ！」

って、付き合う人、付き合う人のことを言われたっけ。

そうだよね・・・

私って、なんでこんな風になってしまったんだろう？

苦しむような道を選んでしまうのは何故なんだろう？

寛哉という今が、一番楽だよ。

そう、そうだ。

その他のことを避けたら、寛哉という自分が、一番楽に生きてる。

不思議だな・・・

第9話：この命の意味

―幼少時代―

私は、所謂『良い子』だった。ご近所の方に会えば、きちんと時間に応じて挨拶をし、回覧板を次のお宅へ廻しに行ったり、お使いを言われれば、どこまでも行く。

横断するときには、右左右右を見て、自動車が来ないのを確認してから渡り、そのときには必ず右手をピンと伸ばす。

学校での成績も、トップではないにしても、トップのほうにいつも位置し、学級委員をしたり、夏休みの自由研究なども欠かさない、そんな子だった。

私の育った環境は、決して裕福な家ではなく、逆に貧しい方だった。

家は借家で、大正に建てられたらしいことを、子供ながらに聞いた憶えがある。がたがたの、隙間だらけの家だ。ところどころ、塗炭で囲われるようなところもあったりして、夏は暑く、冬は、とてつもなく寒い。『お前たちの部屋だ』と宛がわれたのは、3畳の細長い部屋。それを、姉と二つにわけて、1畳半ずつ机を置いて勉強をするような環境だった。

夏の扇風機は、父専用。冬のストーブも、父専用。汗だけで、寒さ、がたがた震えることが、私には当たり前だった。

寝る部屋は、一畳半で寝るわけにもいかないのです、仏壇がある部屋で、二段ベッドで寝ていた。それが、私にとっては『ごく普通』のことだった。

私が母のお腹に宿ったとき、父は、どうしても男の子が欲しかったらしい。それを待ち望んで待ち望んで、産まれたのは、女。私

だった。

母は、一人で入院し、一人で陣痛に耐え、一人で私を産んだ。そして、産まれたのが、女の子とわかると、父は一度も病院には来なかったらしい。

その後も、結局私が大きくなるまで私を一度も抱かなかったという話を、母からも、親族からも聞かされて育った。『いらなかったんだよね』って。

加えて、姉は産まれてすぐから可愛いと言われて育ったが、（確かにお人形さんのように可愛かった）私は、といえば、全くかわいらしさもなく、『お前はぶさいくだな！。この先どうすんだ？』と、口々に言われて育ったのだ。

いらぬ上に、かわいらしさもない。どうやって生きていけばいいのか？

幼心に、私はひょうきんに生きることを選ばざるを得なかった。

しかも、家族や親族の間だけで。この場所だけ受け入れてもらえればいい、と思ったのだらう。

親の躰は、きつと周りから見たら、想像を絶するようなものだった。人様から、お小遣いをもらうようなことがあったら、父に諭えようもないような目で睨まれ、結局、『いいです・・・』と、お断りする始末。もう、私に、何か与えようとししないで下さいと、願うことは日常茶飯事だった。

それでも、大人のすること、無理やり私にお小遣いや物をくれようとする。父は、申し訳なさそうに、そして、私を睨んだまま「すみません」と言って、目配せで「もらえ」と言う。

いつも、心臓がバクバクいていた。

ご馳走を前にしても、父が『ただだけ』というまでは、手をつけてはならない。手をつける時が来ても、加減をみながらしか食べてはならない。

正座をし、肘などつけたものならば、人前でも親の箸で刺される。

まるで・・・躰最中の犬と一緒にだった。

私は、動物か？ と、今ならば思う。

でも、その頃は、必死だった。これ以上、父から叱られたくないし、なるべく穏やかに過ごしたかったからだ。

小学生に入学する前ぐらいから、私と姉は、家事もこなすようになっていた。

掃除、洗濯、茶碗洗い、両親の布団の上げ下ろし。それを二人でローテーションを組んでこなすのだ。

大人になるまで続いた。当たり前だと思っていた。

小学生中学年になると、自分が着る洋服でさえ、お年玉などの小遣いで買うことが当たり前になっていった。

でも・・・それも、当たり前だと思っていた。

これが『普通』なのだ。

それが、『普通』ではないと知ったのは、大分後になってからだっ

そっか・・・私は、普通に育ったんじゃないかな。私が、行き辛いのは、そのせいだったのかな？ 疑問が生まれていた。

だから、早く、独りになりたかった。

親から離れて、独立して、温かい家庭が欲しかった。自分を生きたかった。

今でも残っている。

小学3年生の頃に残した私の言葉。

「生きている意味がわからない。死んでしまいたい。生きていたくない。」

異常だ。今考えれば、こんなことを小学3年生が発するなんて、異常以外の何物でもない。

それぐらい、私は、行き辛かったのだろう。

今それを見ると、健気すぎて、愛おしい。大丈夫だよ、私がいるよ、って、言いたくなる。

そんな私も、中学生に入学したところから、徐々に変わっていった。

思春期が訪れた故か。

荒れた。ソツなく荒れた。親に隠れて、悪いことをかなりした。不良グループに入り、本当に悪いことをした。真面目に学校に来ていた子たちには恐れられていた。

もう、どうでもいいと、思っていたのかもしれない。

それなのに、勉強はそこそこ良かった。

親は、だから気づかなかつたらしい。そして、高校も、不良だったくせに、なんとかランクのいいところに入学できた。

だけど、高校は全く魅力がなく、それもそのはず。その高校も、お金が一番掛からないところを親の意見で決めたからだ。

私は・・・変わリたかつた。

どうせ、2ランクぐらい上の高校に入れるのならば、その専門のところへ行きたいと言った。でも、親は、許さなかつた。

『お前は、あんなに離れたところに行ったら、悪くなる。それに、

金がどれだけかかると思ってるんだ!』

そんな反対に、経済力のない子は従うしかない。

もう、高校にも、何の魅力もなかった。

中途半端じゃん。行く意味ないよ。って。

単なる我侭だったのかもしれない。もっと、他に生きようはあったのかも。

だけど、そのときの私は、無気力だった。

そして、不良にも拍車がかかったんだ。

第10話： パーソナリティーが出来るまで

高校3年の秋、他の生徒が進路を決めているのを横目に、私は進学するか、就職するかも決めかねていた。

普通科ではなく、専門分野を選んで入学した学校で、唯一真面目に学んだのは、その専門科目だったので、本当はその専門学校に進みたかった。その後の進む方向まで、自分の中では決まっていたのだが、親からは、また高校を選ぶときと同じ理由で反対され、進学するならば地元の国立大学のみで、その後の進路まで決められたレールを敷かれたのだ。

もう、親の思うようにはなりたくない。

早く、独立して家を出よう。そう決めたのに、学校での態度が悪かったことを理由に、就職の斡旋してもらえない始末。私と、少数の生徒だけ、宙に浮いた状態だった。結局は、自分の責任なのだ。

母親が見るに見かねて、専門分野を活かせる就職先を知人から紹介してもらい、なんとか就職できることになったのは、もう、街路樹も、寒々しい姿になった頃だった。どうしようもない人間だった。

春――

就職した職場では、がむしやらに働いた。高卒なので、そう初任給が良かったわけではないが、それなりの給料をもらい、何より仕事が楽しかった。勉強よりも、ずっといい！ そう思い、どんな仕事を覚えていき、一人で任されるところまで行った。本当に、楽しかった。

その反面、就職したというのに、親の私に対する態度は一向に変わらず、門限もいまどきの高校生以下、相変わらずだった。どうしても、この環境から脱したい。

そして、結婚して家を出ることを夢みるようになっていた。

結局、結婚に対しての感覚を間違っ て捉えていたのは私なのだ。どうしても、家から離れたかった。

どうせ、私は、一度もちゃんと親から愛されていなかったのだし。

目の上のタンコブだったんだし。
卑屈にもなっていた。

寛哉といえるようになって、穏やかな日々をそれなりに送れるようになっていたけど、私はその間も、自分自身のことを冷静に分析するようになっていた。

どうして私はこんな風になったのか？ 生き辛いのはなぜなのか？

そして、産まれ出でたときから遡って、幼少時代、学生時代、大人になってから・・・を辿っていくと、それはとても苦しい作業だったけれど、自分がこのように出来上がった理由がわかったような気がした。

私には、『絶対的な愛』が足らなかったんだ。 その『絶対的な愛』とは、両親からの愛だ。そこがE・ゲージだったら、その後の愛も受け入れることが難しくなってしまうのだろう。絶対的な愛とともに、絶対的な信頼関係も築けなかったのだろう。

過剰なまでに人の顔色を伺い、気を使い、疲れ果てる。

そんな私のパーソナリティーも、そこから来ていたのだと思う。

寛哉に出会ってから、何度も何度もそれらを注意され、指摘され、徐々に、ゼロからスタートを切れるようになっていたような気がする。

過剰な気遣いは必要ないんだ、と気づき、私が「したい」と思ったときに、心遣いできるようにしたいと思い、人に嫌われたつていいから、自分を生きようと思えるようになったり、とにかく、寛哉は私を変えてくれた。根本から。

優しさと弱さ、強さと傲慢さ、それらも寛哉が教えてくれたことだ。よく、寛哉に、

『お前は、優しいけどさ、それは本当の優しさじゃねーぞ。相手は、その優しさを食い尽くして、もつともつと、と望んじまう。最後の最後にお前がそれを突き放したら、そいつはどうなんだ？ 優しさは、冷たいようだけど、初っ端から突き放さなくちゃいけないときもあんだぞ』

と、言われていた。

最初は、否定した。

『そんなことないと思う！ 優しさは、どこまでもその人のためにできることをしてあげることだと思う』
そんな感じで。

でも、今は思う。 そうね、寛哉の言うとおりだね、って。

私は、寛哉といることで、強さと優しさを持てるようになったのだと思う。

それほど、寛哉ほどの強力なやつじゃないけど。 ちよつとだけど。

私みたいなやつ、よく、嫌にならずに一緒にいたな・・・こいつ。
ふと、思った。

第11話：生きる

人は、何故生まれてきて、何故苦しみを抱えて生きるのだろう。ずっとそう思ってた生きてきたような気がする。

その答えは、今も完全に出たとは言えない。

だけど、漠然とだけど、苦しみの中を生きてきたから言えることは、その苦しみをすら、自分の一部となって溶けていく、ということだ。その苦しみの最中は、とてもそんなこと言えない。

苦しくて、命すら維持するのも怪しくて、それでもなんとか一筋の細い系のようなものに捉まり生きる。その、一筋の細い細い系は、本当は、胎児の時にしつかりと母の子宮と繋がっていたへその緒のように太いものなのかもしれない。へその緒は、見た目には一本の管のように見えるが、実は幾重にも束なるものから出来ている。

その細く見える系を決して離してはいけない。

必死に、滑稽に見えてもいいから、なんとか離さずに生きてみたほうがいい。

そのうち、その細い系は、実は、そのへんの太く逞しい綱よりも心強いものだということを身をもって知るときが来るだろう。

私は、親との関わりが、とても大きくその後の人生に影響を及ぼしてしまったのは否めないが、もう私も子供ではない。

そのことから、一步も二歩も歩き出さなくてはいけないのだ。

そして・・・両親がいなければ、私はこの世に生を受けなかった。

喜びも哀しみも、そして苦しみを味わうことすらできなかったのだ。

だから、私は今、親にこれ以上にないぐらい感謝をしている。
『産んでくれて、ありがとう』って。

生まれてきて様々な経験をしなければ、人の痛みを知ることになったろうし、共感することも極力少なかっただろう。だから、感謝だ。それしかない。

そして・・・

こう思えるようになったのも、寛哉の存在はかなり大きかった。
私の体の中の奥の奥の奥底から、感謝の言葉も言い表せないぐらい感謝をしている。
本当にありがとう。

この先・・・

私は、正直なことを言ったら、生きることをちゃんと教えてくれた寛哉とずっとずっとこのまま一緒にいたい。

だけど、今も結婚をする気持ちにはなれないし、恋愛もしていない自分を知っている。明らかに彼との温度差があるように感じていた。

これから、どうすればいいんだろう。

いつも、そんなことを考えていた。

寛哉はこの先どうしたいんだろう。

2年と数ヶ月が過ぎた頃、寛哉がふと私に言った。

「結婚するか？」

言葉が出なかった。

その代わりに、楓を失ってからしばらくは泣き続けたけど、逆に一時から感情を抑えるかのように人前であまり泣かなかった私が溢れるような涙を流していた。

喜び？ 哀しみ？ 何の涙なのか、自分でもわからなかった。

ただ・・・

わけもわからず、涙が出ていた。

そして、私は、寛哉のその言葉に、とうとうその日、答えを発することはなかったんだ。

第12話： エピローグ

それから、毎日考えた。

ずつと一緒に寛哉といたい。 だったら、結婚はありなのか？ こんな私でも、寛哉を幸せに導くことができるだろうか？

考えに考えた。

答えは・・・

「どうよ、あみ」

「うん、そうね。」

すぐに、先日のことだとわかった。

また、二人の大好きなビールを傾けながら、美味しいおつまみを出すお店で、和気藹々飲んでいた。

「寛哉さ、結婚に対して、どう思ってる？」

「結婚か・・・俺は、正直、それほどの願望がなかったな。趣味が一番に考えてたしな。それほど一生一緒にいようと思った女にも出会わなかったしな。今が、一番結婚を考えてるときなのかな。」

「そっか・・・で、結婚自体についてはどう思う？」

「一生一緒に生きるってことだろ？冷めることもあるだろうし、喧嘩もするだろうし、それでも一緒にいたいやつといるってことだろ？」

「ん・・・そっか。そうかもね。」

そこで、私はそのことに触れることを止めた。

今日は、寛哉と、楽しく飲みたい。 いつものように、ばかみたい

な話で、とことん楽しく飲みたかったんだ。

「じゃ、そろそろ時間も時間だし、帰つか。」

「そうだね。」

夜道を、二人歩きながら、ほろ酔いも手伝って盛り上がっていた。

「寛ちゃん」

「なんだよ」

「あたしね、寛ちゃん大好きだよ。今まで生きてきた中で、本当にいろんなこと教えてくれた人だよ。あたしが、リスタートのラインに立てたのって、寛ちゃんのおかげだよ。」

「んだよー、気持ちわりーなー」

「はははっ」

「あほか」

呆れながらも、笑ってる寛哉がいる。
ずっと、ずっと、このままでいたいな。

「あたしね、すんごく考えたんだ。結婚、悪くないのかな？とか、寛哉、あたしでもいいのかな？とか。」

「当たり前ーだろー。じゃなきゃ、『結婚すつか』なんて、言わねーぞ。ほんと、あほか。」

ちよつと照れくさそうだね。

「うん、ありがとう。でね、すんごくすんごく考えた結果さ、やっぱり、ここで別れるよ。」

「は？何言ってるの？」

「あたしね、今、どうしても結婚できない。結婚・・・この先もできるかわかんない。寛ちゃんのこと、心底信頼してる。でも、

だから、怖い。今は、無理なんだと思う。そのまま、待つてくれるってもし言ってくれたとして、それが重荷になる。恋愛も、正直できない。そんな男と女って、本来有り得ないような気がする。」

「俺はさ、全てわかっててお前に言っただよ。」

「うん、そうだって思っただ私も言ってる。」

ちよつと沈黙が続いた。

「今日は、このまま帰ろうな。で、明日、ちゃんと話そう。」

「わかった」

そのまま、二人は分かれた。

ごめんね、寛哉。
ありがとね。

翌日、寛哉から電話が来た。

「どうよ。」

「うん、変わらないよ。」

「そっか・・・」

「うん、ごめん。」

「お前・・・案外頑固だもんな。　　ったく、頑固もの！」

笑って言う寛哉。

もう、言葉にはならなかった。

「じゃあさ、一言だけ言うぞ。　絶対になれよ！　もう、前のお前に戻んなよ！」

ふ・・・言葉なんて、出るわけないでしょ。　涙しか出ないよ。

「寛・・・」

「じゃあな。もし、お前がどん底になるようなことがあったら、連

絡しろよ。それ以外は、二度とすんなよ。わかったな？」
「わかった。」

さよならだ。

本当にさよならなんだ。

きつと、寛哉は、私と一緒に生きれないよ。

結婚をせずに、このままの私たちの年齢でいられたら、ずっと一緒にいられるかもしれない。でも、私たちは、悲しいかな年を重ねてしまう。

そうだったら、きつと私たちは、変わってしまうだろう。このままではいけない。

そのときの私を想像したなら、もう、結婚という道を選ぶことはできなかった。

寛哉は、私のような女ではなく、違うタイプの、自分とは全然似ていない女性と結婚した方が幸せになるような気がした。

まだ、私が自分に自信がないのかもしれない。

逃げてるのかもしれない。

もつと、時間が経ったら、違う二人になれたのかもしれない。
でも・・・

それほどの時間は、二人にとってたつぷりあるわけじゃない。

だから、別れを選んだよ。

寛哉、この先の私の人生、終焉を迎えるまであなたの幸せを願うからね。
ずっとずっと忘れないからね。

私も、もう二度と恋愛をする気も、結婚をする気もないけれど、もしそんなときが来たなら、思いつ切り命を全うするからね。

さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2386c/>

生きる意味を知りたい

2010年10月11日00時32分発行